

主の2022年を迎えました。あけましておめでとうございます。感染症の影響を受けたこの2年間を振り返り、なお継続している困難な状況の中にも神のご支配があることを覚えつつ、導きに従って歩みたいと思います。

イザヤ書56章8節に、次のように記されています。「——イスラエルの散らされた者たちを集める方、神である主のことば——すでに集められた者たちに、わたしはさらに集めて加える。」とあります。56章以降に、主のしもべとしてやがて来臨される救い主による祝福が語られています。私たちは、主イエスが世の光となって来臨されたことを記念してクリスマスの時を過ごしました。救い主なるお方を迎え、恐れをもってその御声に聴き従う者とされたのです。その私たちを、神はキリストにあって一つに集めてくださいました。そして「さらに集めて加える」と約束しておられるのです。

この8節のみことばは、直接的にはイザヤが預言した時代のイスラエルの民に向けて語られました。神は不信の民を異邦人の手に渡し、捕囚の地へと散らされましたが、やがてエルサレムへの帰還をお許しになり、彼らは再び集められた民となりました。更にその先にある全世界的な救いのご計画がここに告げられています。6~7節に「また、主に連なって主に仕え、主の名を愛して、そのしもべとなった異国の民が、みな安息日を守ってこれを汚さず、わたしの契約を堅く保つなら、わたしの聖なる山に来させて、わたしの祈りの家で彼らを楽しませる。」と記されています。イスラエルではない「異国の民」も、主において集められると語られたのです。私たちは選びの外にあって者でしたが、今は主に仕えるしもべとされて、共に御前に集められています。私たちにとって日々の生活の基は、主の日(日曜日)にともに集められ、主に礼拝をささげることです。しかしコロナウイルスの感染拡大によって教会堂に共に集って神に礼拝をささげることが妨げられ、私たちは8節に書かれているように、ある意味で「散らされた者たち」となりました。2020年の春の感染拡大期には、まだオンライン配信はできず、週報と説教原稿を教会堂に受け取りに来ていただき、各自宅に戻って同時刻に礼拝をささげました。2021年はオンライン配信も加えて各自宅礼拝とし、礼拝堂ではごく少人数で同時刻に礼拝をささげました。しかし感染が終息に向かう中で、再び教会堂に集められて礼拝することができ、その恵みを新たにさせていただいています。イザヤ書のみことばには、「すでに集められた者たちに、わたしはさらに集めて加える。」との主の約束が記されていますから、今こうして再び集められた私たちは、主において共に集められる人たちが更に増し加えられることを信じ、みことばの約束に期待するのです。

共に集うことができないというようなことを、私たちはこれまで経験したことがありませんでした。土曜日の深夜に大雪が降って、翌日の礼拝に集うことができないということはありませんでした。北国では、比較にならないくらいの大雪の中でも、何事もなく教会堂に集いますが、関東では数センチの積雪でも外出できなくなり、何年前のことだったでしょうか、あの日の礼拝出席者は10人程だったと記憶しています。でもそれは一度限りでした。日本の教会の歴史の中では、戦時中、当時のキリスト者たちは共に集うことが許されず、散らされた状況で信仰を守り通しました。そして再び集められた時に、教会には多くの人々が集ったのです。既に信仰に導かれた人々が再び集められ、更にその信仰の証しを見た人々が、共に主の御前に集められました。その教会は、散らされる前の教会とは全く違うものになったと言われています。

今、感染症の終息によって、様々な制限が解除され再び共に集められることを願う中で、『以前のように』と言う言葉をよく耳にします。確かに以前のように自由に集まることを願うのですが、しかし何も振り返ることなく元に戻ることが本当に神のみこころなのかと考えさせられます。2020年にコロナウイルスの感染が拡大し始めた頃に、疫病について聖書がどのように語っているのかを学びました。旧約聖書にはイスラエルの民の神への背信に対して、神が民の中に「疫病を送り」、また「疫病に渡された」と記されていることを見ました(詩篇78:48,50)。真の主権者である神の許しがないければ、疫病も自然災害も起こり得ないことを聖書はこのように教えています。ですから、私たちはこの時代に起きている出来事の中にあっても、神が何故これをお許しになったのか、主のみこころは何なのか、よくよく考えなければならぬのではないのでしょうか。

イスラエルを疫病に渡された神は、民に背信の罪を悔い改めるよう求められたのですが、私たちも今、ただ『以前のように』と言うことはできないのではないかと、私たちがこれまでの歩みを振り返って変えていただくべきことや悔い改めるべきことがあるのではないかと、以前のようにではない主のみこころの道を探し求めるべきではないかと、そのように考えさせられます。一人ひとりの歩みに於いても、また教会の働きの中にも、考え直すべきことがあるのではないかと、悔い改めるべきことがあるのではないかと祈られます。コロナの終息を私たちは願って祈っていますが、その祈りはコロナ以前に戻るためではなく、これを通して神が私たちに教えておられること、考えるようにと願っておられることについて、よく考えつつ祈るべきではないかと思うのです。散らされていたけれども、以前と同じように再び集められたというのではなく、以前のようにではない歩みを、神は私たちに求めておられるのではないのでしょうか。

聖書のみことばから教えられることは、主の御前に一つになって共に集められるということ、そして集められて主に礼拝をささげると言うことです。それは教会として最も大切にすべきことです。私たちの喜びのために集まるのではなく、私たちを集めてくださった神に喜ばれるために集められると言うことです。

詩篇133篇1節に、「見よ。なんとという幸せ なんとという楽しさだろう。兄弟たちが一つになって ともに生きることは。」と記されています。表題に「都上りの歌」と書かれています。イスラエルの過越の祭り、五旬節、仮庵の祭りの三大祭りの

時に、ユダヤ人の成年男子はエルサレムに来て礼拝することを主によって命じられていました。その旅の時の歌がこの「都上りの歌」です。133 篇には、各地からエルサレムに集められた民が、一つとなって神の御前に集ったその喜びと幸いが歌われています。このみことばから、キリストの教会に属する者となった私たちも、主にあつて一つとされた幸いを教えられます。私たちも神の御前にともに集められ心を合わせて主に礼拝をささげる幸いをいただいているのです。そしてそれこそが私たちにとって最も大切なことであり、そのために主の教会の交わりがあるのです。

主は私たちが一つとなることを求めておられます。エペソ人への手紙 4 章 13 節に、「私たちはみな、神の御子に対する信仰と知識において一つとなり、一人の成熟した大人となって、キリストの満ち満ちた身丈にまで達するのです。」と記されています。賜物も奉仕も、それぞれに違いますが、キリストのからだである教会を建て上げるために、一つとされ、「かしらであるキリストに向って成長する」、そのために私たちは集められるのです。ですから、主の御前にともに集められ、各々が主に用いられて成長することが真の教会の姿なのです。

教会の本質は、集められて一つとされると言うことです。「兄弟たちが一つになって ともに生きること」です。そして共にささげる礼拝を最も重要なこととすることです。私たちは散らされましたが、再び集められました。更に集められるとの約束をいただいていますので、主の日の礼拝に集う幸いを深く感謝し、みことばを信じ新しく歩ませていただきたいと願います。